
銀魂～冷血の鬼姫の日常～

ナナフシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂〜冷血の鬼姫の日常〜

【Nコード】

N5198Y

【作者名】

ナナフシ

【あらすじ】

ちよつとした趣味で書いてみました。

銀時に義兄妹が居たら？っと思って書いてみました。

二次小説なんて初めてなので上手く書けたか不満です。

まあ、あらすじを書いてみますか。

攘夷戦争時、白夜叉の隣に立っていた女が居た。

女の名は雨宮咲、咲は『冷血の鬼姫』と言われていた。

咲は無表情で天人を斬る事からそう呼ばれた。

敵から恐れられた武神である。

そして、今、その咲が銀時の目の前に現れて万事屋に入る。

万事屋トリオと咲が織りなすコメディー？だと思えます。

シリアスならごめんなさい。

それが嫌な方は回れ右！

咲は銀時の事が好きと言う設定なのでよろしくお願いします。

第一訓　義妹

歌舞伎町を一人の女が歩いていった。

その女の人は超美人である。

彼女の水色の髪を靡かせて歩いていた。

腰には木刀を挿している。

すれ違う度に男の人がその女に釘付けである。

女は空を見上げた。

「この町に居るのかな……銀兄さん」

女はそう呟いた。

女は歩き出した。

「誰かに聞いてみようかな」

女は辺りを見回した。

「あ、あの子に聞いてみよ」

女は眼鏡を掛けた青年に近づいた。

「あの、聞きたい事があるんですが」

「あ、はい、何でしょうか？」

女が喋りかけたのは、地味眼鏡の志村新八であった。

「誰が地味眼鏡だコラァ！」

新八は地の文にツツコンだ。

ツツコンでも意味ないのにね。

「あの、誰に言ってるんですか？」

「ああ、すみません。何かバカにされた気がして」

新八は女にペコツと謝った。

「それで何か用ですか？」

「えーと、人を探しているんですが……」

「特徴とか、名前は？」

「銀髪で天然パーマで年中死んだ魚の様な目をした男で、名前は坂田銀時」

「え？銀さんに何か様ですか？」

新八は女に尋ねた。

「え、知り合いなの！？」

女は新八に詰め寄った。

「は……はい」

新八は頷いて答えた。

「銀さんが営んでる万事屋で働いている志村新八です」

「私は雨宮咲です」

女はそう名乗った。

「案内してくれませんか？」

「え？はあ、今向かう所なので良いですよ」

新八は承諾した。

「ここです」

新八は万事屋銀ちゃんの前まで来ていた。

「ここかア」

咲はそれをじいっと見ていた。

「こっちです」

新八は階段を上がり始めた。

「あ、はい」

咲はその後をついていった。

「ただいま戻りました銀さん」

新八は万事屋のドアを開けて入った。

咲もそれに続いて入った。

そして、リビングに行くと言髪で天然パーマの男がデスクに座ってジャンプを読んでいた。

その男は坂田銀時である。

ソファでは、オレンジ髪の少女が居た。
少女は神楽である。

「銀さん、客人ですよ」

「あ？誰だ……！！」

銀時はジャンプから目を離して咲を見ると驚いた。

「さ……咲！」

「見つけた銀さん」

咲はニツコリ微笑んだ。

新八と神楽は咲の言葉を聞いて驚いた。

「ぎ、銀兄さん！？」

「銀ちゃんの兄妹アルカ！」

「血は繋がってないけど、義兄妹だよ」

咲が銀時の代わりに答えた。

「咲……テメエ生きてたのか？」

「酷いなア、勝手に殺さないでよ」

咲はそう言った。

「私は銀兄さんが生きてて安心したよ」

「あ、ああ」

銀時は頷いた。

「で、何しに来たんだ咲」

「銀兄さんに頼み事があった」

咲は銀時に近づいた。

「何だ？」

「ここに住ましてくれない？」

咲はそう言った。

「うーん、どうs「ダメ？」うつ」

咲は上目遣いで銀時を見る。

「良いよね？」

+ 涙目。

銀時は我慢の限界であった。

「わかった！わかったよ！ここに居ろや！」

銀時はそう答えた。

「ありがとう銀兄さん！」

咲は銀時に抱きついた。

「ハア……たくっ」

銀時はそんな咲の頭を撫でた。

万事屋メンバーに咲が加わった。

第一訓〜義妹〜（後書き）

作者「どうも、作者のナナフシです」

咲「オリキヤラの咲です」

作者「色んな二次小説を読んできたと書きたくなったので思い切って書いちゃいました」

咲「銀魂〜冷血の鬼姫の日常〜を読んで頂きありがとうございます」

作者「上手く書けてるか心配ですが、前向きに書いていこうと思います！」

咲「これからも……」

作者・咲「よろしくお願いします！」「」

咲のキャラ紹介（前書き）

ナナフシ「はつきり言って僕服装のセンスないから咲の服装思いつかないからその人の想像に任せます」

咲「キャラ紹介なのに!？」

銀時「ダメ作者だな」

ナナフシ「うん、自覚してるから」

咲「否定しないの!？」

ナナフシ「自覚はあるから」

銀時「つまり認めてるんだな？」

ナナフシ「ああ、そして……銀さんのシスコン!」

銀時「俺はシスコンじゃねえ!」

ナナフシは銀時に木刀で殴られる。

ナナフシ「ゴフアアアア!」

咲「あはははは……では、今回は私のキャラ紹介です……どうぞ」

咲のキャラ紹介

名前 雨宮 咲

年齢 19歳 誕生日10月19日

好き 甘い物、銀時

嫌い 辛い物、土方、今の高杉（昔は嫌いではなかった）

髪 水色

瞳 赤色

すごく美少女なのだが、銀時の事が好きなブラコン。

銀時の事を「銀兄さん」と兄と呼んでおり、銀時も義妹だと認証している。

剣の腕は銀時の次に強く、攘夷戦争に参加した経験がある。

攘夷戦争では“冷血の鬼姫”と呼ばれていた。

過去の戦いの……“冷血の鬼姫”の頃の記憶が蘇ると無表情で相手に襲いかかる。

たとえ攻撃を受けても無表情である。（ダメージを喰らってる事は喰らってます）

今では銀時と同じ様に「自分の大切なものを護る」と言う思念を貫いています。

新八の事は「新八さん」、神楽の事は「神楽ちゃん」と呼んでいます。

よく銀時と喧嘩する土方を嫌っている。

ナナフシ「こんなもんでしょうか」

咲「まあ、読者から感想を貰って、まだ教えてほしい所があるなら書けばいいんじゃない？」

ナナフシ「そうですね！服装以外なら咲の教えてほしい所を受け付けます！」

銀時「頑張れナナフシ」

ナナフシ「おうよ銀さん！」

咲「それじゃあ、私のキャラプロフィールは終わりです」

咲のキャラ紹介（後書き）

ナナフシ「今回は咲が歌舞伎町を歩き回ります」

咲「もちろん銀兄さんと一緒だよな？」

ナナフシ「え」と、それはまだ「一緒だよな？」は……はい！」

ナナフシの首には何処から持ち出してきたのか知らないが刀が向けられていた。

咲は顔が無表情だった。

ナナフシがそう答えると刀を鞘に収めた。

ナナフシ「ふ、ふう、助かった。さてと今回は“第二訓”咲の歌舞伎町周り“です！”

咲「次回もよろしくお願いします！」

第二訓　咲の歌舞伎町周り（前書き）

咲「親父にもぶたれた事ないのに！」

銀時「急にどうした咲！？」

咲「いや、作者のナナフシにこれを言っつて言われたから」

銀時「思いつきりガ。ダムじゃねえか！」

ナナフシ「いやあ、今のアニメ銀魂は蓮蓬編じゃないですか？あれでガン。ム出てきたし……咲に言わせてみようかなって」

銀時「思えばナナフシは。ンダムも好きだったな」

ナナフシ「はい！後は銀さんお願いします！」

銀時「おう！“銀魂　冷血の鬼姫の日常”始まるぜ！」

第二訓　咲の歌舞伎町周り

咲が万事屋に入って次の日……。

「銀さん！今日は仕事もないし、咲さんに歌舞伎町を案内してあげましようよ！」

いきなり新八がこんな事を言い出した。

今日はって……滅多にないくせに。

「本当！」

咲は顔を輝かせて答えた。

「ああ？んなもん怠いから新八と神楽で案内をしてこいよ」

銀時は頭を掻きながら言った。

「銀兄さん……案内してよ……」

咲は前回と同じく上目遣いで攻めてきた。

「嫌だn「お願いだよ」……うつ」

+ 涙目……てか、前回と同じじゃん！

銀さんがまず怯むとは……恐るべし咲！

「だあ！わかった！案内してやれば良いんだろ！」

銀さん……咲の攻撃にあえなく撃沈。

「ありがとう銀兄さん！」

咲は銀時にお礼を言った。

ちゃんとお登勢には話を通してある。

銀時はその時お登勢にアツパーされたらしいが。

万事屋メンバーは咲に歌舞伎町を案内する事になった。

「……で、何で腕組み？」

銀時は咲を見た。

銀時と咲は腕組みをしていた。

「銀さん……僕達から見れば恋人同士に見えるんですが……」

新八は銀時にそう言った。

「いや、俺と咲は義兄妹だから」

銀時はそう答えた。

「あ、お花屋さんだ」

咲は花屋を見つけて近寄った。

銀時、新八、神楽は顔が青ざめた。

「色んなお花があるな」

咲が見ていると。

「いらつしゃいませ」

中から出てきたのは、鬼の様な顔をして、緑色の人物……

「初めまして、僕、花屋をやっています。屁努紹ヘトリです」

赤い眼を光らせて、恐ろしい声で自己紹介した。

それを見た咲は冷や汗を流し、顔を青くした。

そして、銀時の方を向き、涙目で助けての目線を送った。

屁努紹は万事屋トリオを見つける。

「おや、坂田さんに志村君に神楽ちゃんじゃないですか」

「ど、どうも……屁努紹様……いや、屁努紹伯爵」

銀時は引きつった顔で挨拶した。

「屁努紹で良いですよ。彼女は坂田さん達の知り合いで？」

「そ……そうです……」

新八も引きつった顔で答えた。

咲は銀時に涙目ですがみついて、体をブルブル震わせている。

「そうですか。お名前は？」

「あ……雨宮咲です……」

「雨宮さん、これからよろしくお願いします」

屁努紹は笑った顔で言った。

それが更に恐く見えた。

そのまま、ヘドロの森を出た。

「こ……恐かったよオ」

涙目で今だ銀時にしがみついている。

「ま、まあよく頑張ったじゃねえか」

銀時はそんな咲の頭を撫でる。

公園に入ると、サングラスをかけたおっさんがベンチで横になっていた。

「よお、長谷川さん」

銀時はその男の事を長谷川と呼んだ。

「ああ、銀さん達か……その子は？」

「初めまして、雨宮咲です」

「俺は長谷川泰三だ」

「マダオこんな所でどうしたアルカ？」

「マダオ？」

「だから俺はマダオじゃないって！」

長谷川はマダオを否定した。

「神楽ちゃん、マダオって何？」

「まるでダメなおっさん、略してマダオアル」

「まるでダメなおっさん……」

咲は長谷川を哀れみの目で見た。

「ちよっ！咲ちゃんがひいちゃってるじゃん！」

「まだまだ色々アルネ。まるでダメな夫、まだまだ墮落するおつさんとかネ」

咲は更に哀れみの目を向けた。

「その目をやめてええええええええええ！」

長谷川は大声で叫んだ。

長谷川と別れて歌舞伎町の町を歩いていると。

「む、銀時と新八君とリーダーではないか」

銀時達に話し掛けたのは黒髪で長髪の男だった。

隣には、白いペンギン？が居た。

「よお、
ヅラ、
エリザベス」

「ツラじゃない桂だ……咲ではないか！」

「久しぶりヅラさん」

「ツラじゃない桂だ！」

銀時達に話し掛けたのは、攘夷志士の桂小太郎である。

その隣に居るのはエリザベスである。

「ヅラさん……これ何？」

咲はエリザベスを見て桂に聞いた。

「ヅラじゃない桂だ。こいつはエリザベスだ」

『どうも、エリザベスです』

エリザベスは文字が書かれたプラカードを出して挨拶した。

「ど、どうも」

咲は戸惑いながらも挨拶をした。

「咲も居る事だし……銀時、咲よ！今こそ攘夷志士になると」

「嫌だ（だよ）」

二人の返答はハモった。

「何故咲まで！？」

「もう私は攘夷は真っ平ゴメンだよ。また仲間が死ぬ所は見たくないもの」

「咲さんも攘夷戦争に参加していたんですか！？」

「うん」

新八と神楽は咲が攘夷戦争に参加していた事に驚いた。

「白夜叉の隣に立ち、無表情で天人を斬る事から“冷血の鬼姫”と呼ばれたお前と銀時の力さえあれば！！」

「ヅラ、前にも言ったが、もう俺達の戦は終わったんだ。まだわからねえのか？」

「それでもd「桂アアア！」」

ズドォーン！

バズーカが何か撃つ音が聞こえた。

そして……ドカァン！

爆発した。

桂とエリザベスはそれを避けた。

飛んできた方を見ると……黒い制服を着た男二人が立っていた。土方と沖田である。

「ちっ、真選組か！さらばだ銀時、咲！」

桂とエリザベスは走っていった。

「後を追いかけるぞ総悟！」

「わかってますぜい」

二人はパトカーに乗り、桂とエリザベスの後を追った。

銀時達はと言うと……爆発へアーになっていた。

こうして、歌舞伎町案内は終わった。

第二訓く咲の歌舞伎町周りく（後書き）

ナナフシ「最後が爆発へアーで終わりでした！」

銀時「ふざけんじゃねえぞ！ナナフシ！」

咲「別の終わり方はなかったの！？」

ナナフシ「いや、思いつかなかった」

銀時・咲「おい！！」

ナナフシ「では、第二訓終了です。次回からは銀魂の原作を使います」

咲「オリジナルストーリーも考えてるんだよね？」

ナナフシ「はい、オリジナルストーリーではオリキャラが出てきます」

銀時「それネタバレじゃねえか？」

ナナフシ「どうせ、オリジナルストーリーの時点でわかっている人も居ますよ」

銀時「たくっ」

ナナフシ「それではさようなら！」

第三訓く真選組に女隊士が来たく（前書き）

ナナフシ「オリキャラが思いついたので出す事にしました」

銀時「チンピラ警察共のかよ」

咲「第二のオリキャラも女なんだね」

ナナフシ「はい……キャラプロフィールは次回つつう事で」

銀時「そんじゃ、さっさと始めんぞ」

ナナフシ「はいはい、それではどうぞ！」

第三訓　真選組に女隊士が来た

「おい、新しく入ってくる奴知ってるか？」

「ああ、何でも女なんだろ？」

「こんな野郎しか居ない所に女が来るなんてな」

「何でも土方さんの知り合いだとか」

真選組はこの話題で持ちきりであった。

「局長、副長、来ました」

中に入ってきたのは山崎だった。

「入れる」

「わかりました！」

土方が山崎にそう言うのと女の人の中に入ってきた。

黒髪で、なかなかの美女である。

黒い瞳で土方と近藤を見る。

「真選組に入る事になりました、白瀬　葵です。よろしくお願いします」

葵は近藤と土方に挨拶した。

「よく来たな葵ちゃん！」

近藤は笑った顔で葵を迎えた。

「はい、久しぶりですね近藤さん」

葵も挨拶をした。

「土方さんも久しぶりです！」

土方にも挨拶をした。

「おう」

土方は短く答えた。

「それじゃあ、皆に葵ちゃんの事紹介するからついてきて」

「はい」

近藤と土方の後を葵は追いかけた。

そして、隊士達が集まっている引き戸を近藤は開けた。

隊士達が戸の方を見る……視線は葵に行く。

男共が葵に群がる。

「新しく入る女隊士って君？」

「はい……」

「名前は？」

「白瀬 葵です」

「趣味は？」

「え、え」と

ドンドン来る質問に葵は戸惑った。

「お前等、座れ」

土方が言つと皆渋々戻っていった。

そして、土方と近藤は葵を連れて隊士達の前に来た。

「今日からウチに入る事になった」

近藤が言い出した。

「白瀬 葵です！よろしくお願いします！」

葵はお辞儀をした。

『よろしくお願いしまアアす！』

もの凄い大きな声が帰ってきた。

そりゃ、真選組は野郎の集まりだからね。

美女が来たとなれば、そうなるわ。

葵の挨拶が終わった後、葵の歓迎会を開く事にした。

「え、葵ちゃんの真選組就任を祝ってかんぱーい！」

『かんぱーい！』

近藤の合図に皆は酒を飲んだり、料理を食べたり、葵に質問したり、色んな事をしていた。

「久しぶりでねエ、葵」

「あ、沖田さん。久しぶりです」

葵は沖田にも挨拶をしました。

「酒飲みやせんか？」

「いえ、未成年なので結構です。って言うか、沖田さん……あなた

も未成年ですよね？」

「気にしちゃダメでエ」

沖田は酒を飲み始める。

「こいつはいつもの事だ」

「あ、土方さん」

土方がやって来た。

「死ねや土方アアア！」

もう完全に沖田は酔っぱらっていた。

刀で土方に斬りかかった。

酔うのが早いつて？気にしちゃダメだよ。

それを土方は刀で受け止めた。

「総悟デメエ……いい加減にしろよ」

「今日こそ副長の座は貰いますぜ」

「上等だコラア！かかってこいや！」

土方と沖田の喧嘩が始まった。

「あははは……これも相変わらずだな」

葵はそれを見て苦笑いした。

こうして、真選組に葵が仲間に入った。

第三訓 真選組に女隊士が来た (後書き)

ナナフシ「今回は短いですが、これくらいd」ナナフシイイイイ
！「ん？銀さんつてゴフアアアア！」

ナナフシは銀時の跳び蹴りを喰らった。

ナナフシ「急に何するんですか!？」

銀時「急に何するんですか!?!じゃねえだろがああああ!という
事じゃああああ!主人公である。俺と咲が出てねえじゃねえか!」

ナナフシ「しょうがないだろ!今回はオリキャラを出す為のストー
リーだったんだから!」

咲「銀兄さん、今回はしょうがないよ」

ナナフシ「咲を見なさい!あんたみたいに出番ばかりにこだわって
ないわよ!少しは見習いなさい!」

銀時「お前は俺の母ちゃんか!？」

咲「……いい加減二人共……静かにしてよ……いくら銀兄さんでも
容赦しないよ?」

咲の顔は無表情だった。

ナナフシ(やばい!あの顔は“冷血の鬼姫”の顔だ!)

銀時(いや、まだ完全じゃねえ!無表情でも鬼の様な視線の鋭さが
感じらんねえ!一歩手前だ!)

ナナフシ・銀時(謝っておくなら)

ここで二人の心はシンクロする。

ナナフシ・銀時(今しかない!)

ナナフシ・銀時「咲さん……」

咲「何?……」

ナナフシ・銀時「すみませんでしたあ!」

咲「仲良くする?」

ナナフシ・銀時「します!します!」

咲「よろしい」

咲の顔はいつもの優しい顔に戻った。

銀時「た、助かった」

ナナフシ「では、次回は葵のキャラプロフィールです！」

葵のキャラ紹介（前書き）

ナナフシ「今回は葵のキャラ紹介をしたいと思います」

咲「今回から前書きと後書きにも参加するんだよね？」

ナナフシ「はい、そうです」

銀時「それじゃ、葵よろしくな」

葵「はい、旦那」

銀時が言っていると葵が現れた。

葵「今回から前書きと後書きにも参加させて頂く葵です。よろしく」

ナナフシ「この四人で、前書きと後書きはお送りします」

銀時「それじゃ、始めますか」

葵「はい、私のキャラ紹介です。どうぞ」

葵のキャラ紹介

名前 白瀬 葵

年齢 18歳 誕生日5月9日

好き 真選組の皆（特に土方）、果物

嫌い 野菜、幽霊

髪 黒色

目 黒色

真選組に入ってきた美少女。

土方の事が好きであり、よく土方と居るのが多い。

銀時の事を「旦那」と呼ぶ。

真選組では、剣の腕は沖田と一、二を争う。

咲とは仲が良い。

ナナフシ「これで良いかな？」

銀時「最後の説明少なくてねえか？」

ナナフシ「だって、攘夷戦争に参加していた訳じゃないから咲とは違ってそれは短いよ」

葵「でも、もうちょっと長く出来なかったの？」

咲「そうだよ、ナナフシ」

ナナフシ「すみませんね。それはそうと咲の剣術が決まりました」

咲「本当！」

ナナフシ「はい、咲は我流で静なる剣です」

咲「つまり、銀兄さんの剛の剣とは逆なんだね」

ナナフシ「はい、咲の剣は静なる剣を極めた感じですね。一本の剣で行う連続の突きが数本に見えたりする設定にしています。これで

“冷血の鬼姫”が目覚めたら凄い事に」

葵「語り出したらキリがないよ」

ナナフシ「おおっと、そうだった」

葵「それでは、私のキャラプロフィールは終わりです」

葵のキャラ紹介（後書き）

ナナフシ「今回はオリジナルストーリーにするべきか……原作を使うべきか……どちらか悩んでいます」

咲「オリジナルストーリーが良いと思うな」

ナナフシ「そうですね、でも、原作を使って咲が居る万事屋も書いてみたいし」

銀時「さつさと決めろや」

ナナフシ「ああああああ！もう、真相は次回つつ事で！」

銀時「一樣、オリジナルストーリーが良いか、原作を使うか、読者から募集中」

咲「ない場合は次回をナナフシが決めるみたいだから、締め切りは

……次回が投稿されたらで！」

葵「投稿された後に来た場合はご了承ください」

銀時「まあ、こいつの場合明日だろうけどな、次話投稿」

ナナフシ「それでは」

ナナフシ・銀時・咲・葵「……また次回！！」「」「」

第四訓　漆黒の狗

「はあ、暇だな」

「そうアルナ」

「銀兄さん、神楽ちゃん……本当に全然依頼来ないね」

「これが当たり前です。咲さん」

四人共、それぞれ言った。

「あれ？思えば咲さんの木刀変わってませんか？」

咲の腰には、柄に『支笏湖』と彫られた木刀があった。

「うん、ちよつとね」

実はたまたま銀時が木刀を通販で買っている所を見て、同じ木刀にするために銀時に頼んだのだ。

あの方法で。

「そうですか」

新八はそう言った。

「私ちよつと外行ってくるね」

咲はそう言つと万事屋を出て行つた。

「気をつけてなア」

銀時はそう言つて見送った。

咲がしばらく町を歩いていた。

「外に出てきたのは良いけど暇だなア」

咲はそこら辺をブラブラしていた。

ドンッ。

すると、誰かにぶつかった。

「あ、すみません」

「こつちも悪かったな……ってお前は隊士達がよく言っていた万事屋に入った奴か」

咲がぶつかつたのは土方だった。

「え？銀兄さん達を知ってるんですか？」

「ああ、腐れ縁だな。俺は土方十四郎だ」

「ああ、銀兄さんがよく言っていた大串さんですか」

「誰が大串だ！土方だ！ひ・じ・か・た！」

「はいはいわかりました」

咲は適当に流した。

「なんか出会って早々嫌われてね？」

「銀兄さんとよく喧嘩してる人だと聞いて……このマヨラー」

「何だろぅ……こいつに言われたらめっちゃ心が痛い」

土方は胸を抑えた。

「土方さん！どうしたんですか！？」

「葵か」

葵がやってきた。

本当によく土方と居るな。

「あれ？あなたは？」

「あ、どうも。雨宮咲です」

「私は真選組の白瀬葵です」

「よろしく」

「こちらこそ」

二人は握手した。

「あれ？この二人……意気投合してね？」

土方は二人を眺めていた。

二人はそのまま話し合いながら歩き出した。

「あれ？葵！パトロールは！おい！」

土方は置いてけぼりにされた。

「すっかり遅くなっちゃった」

咲は満月がきれいな夜を歩いていた。

葵と仲良くなり、ずうと夜まで話していた。

「綺麗だな」

咲は満月を見ながら歩いていた。

「その水色髪の女止まって下さい」

咲は言われて止まり、振り返った。

そこには、服装はほぼ黒色で染まっており、腰には鐔はなく、柄と鞘が黒色の刀を挿した女が居た。

肌は白かった。

「何？」

「“冷血の鬼姫”とお見受けします」

ピクッ。

咲はその言葉に反応した。

「何でそれを知っているの？」

「すみません。紹介が遅れました。僕の名前は影野 陰子いんこです」
女は挨拶をした。

「私は何で知ってるのって聞いているの」

「鬼兵隊と言えはわかりますか？」

「鬼兵隊！」

咲は顔を陰しくした。

高杉が率いる鬼兵隊。

咲も銀時を探している時に一度高杉と会い、勧誘された。

だが、咲はそれを断った。

「高杉さんから聞いたの？」

「はい。僕はあなたを勧誘しに来ました」

「前も言った通り行かないよ。私は銀兄さんと共にあり続ける。私は大事な物を護る為に戦う。ただ破壊を楽しむあなた達にはついて行かない」

「そうですか……なら」

陰子は鞘から刀を抜いた。

刀身は黒に……いや、漆黒の色だった。

咲は木刀を腰から抜き、構えた。

「殺します」

陰子は咲に向かって走ってきた。

咲も陰子に向かって走り出した。

「ハア！」

咲は木刀を横薙ぎに振った。

咲の木刀は陰子に当たった……様に見えたが、それは幻影の様にゆらつと消えた。

「……！」

「僕には異名がありませんね……“漆黒の狗”と言う異名が」

咲は後ろから声が聞こえて振り返った。

そこには刀を振り下ろそうとしている陰子が居た。

「異名の意味はその名の通り……月夜の闇に紛れる事……からです！」

陰子はそう言った途端刀を振り下ろした。

咲はそれを咄嗟に木刀で受け流した。

「……速いですね。あなたの剣は静剣ですか」

（私の剣が読まれた！）

咲はあれだけで自分の剣を読んだ事に驚いた。

「行くよ！ハアアアアアア！」

咲は連続で突きを放った。

「そんな物……何！？」

陰子は驚いた。

何故なら一つの木刀で放っている連続の突きが、咲の周りに五、六

本あるのだ。

「ちっ！」

陰子は一生懸命防御をするが。

（わからない！どれから放ってきているのかわからない！これは速すぎる！）

咲の木刀を防がないでいた。

防げたとしても数十回だけだ。

「フィニッシュ！」

咲は思いつきり突きを放った。

ドココココココ！

素早く連続で突きを放った。

その為、咲の周りにあった木刀も一斉発射した様に見えた。それがすべて陰子に命中した。

「くう、やりますね。なら！」

また咲の目の前から姿を消した。

「後ろ！」

咲は素早く後ろを見た。

だが、居なかった。

「絶対の死角である後ろからだけじゃありませんよ？」

咲の右側から声が聞こえた。

「喰らえ！」

陰子は刀を思いつきり右斜めに振り上げた。

咲はそれを咄嗟に交わした。

だが……。

プシュツ。

頬に切れ目が入った。

「そこまでバカじゃないよ」

陰子は言った。

「それに刀が黒いのは僕と一緒に闇に隠れる為だけじゃない」
陰子は素早く咲の目の前に移動した。

そして、横薙ぎに刀を振った。

「くっ！」

咲はそれを防ごうとした。

「！！！」

咲は驚いた。

何故なら刀が見えない。

腕ごと何処かに行った様に。

「下だよ」

パツと下を向くと、刀を振り上げてきた。

咲はそれを後ろに飛んで咄嗟に避けた。

（姿だけじゃなく、刀まで……これは厄介かも）

陰子は咲との間合いを詰めて、連続で刀を振ってきた。

それを咄嗟に木刀で防ぐ。

だが、見えない攻撃のせいで腕や足、顔に切れ目が入る。

「くうう！」

「ハア！」

咲は思いつき蹴飛ばされた。

「ぶっ！」

咲はそのまま地面を転がった。

「そんなもののなのか？ “冷血の鬼姫”？」

咲は立ち上がった。

「！！そだよ。その顔だよ」

陰子は何かを嬉しがっていた。

咲の表情は無表情であり、鬼の様な鋭い目線を陰子にぶつけていた。

咲は本気を出さなきゃ勝てないと踏んだのだ。

「来い！ “冷血の鬼姫”！」

陰子がそう言うと咲は木刀を構えて走り出した。

第四訓く漆黒の狗く（後書き）

ナナフシ「続きは次回です！」

咲「居たアアアア！」

ナナフシ「げっ！見つかった。早く逃げなきゃ……ってあれ？源外さん？」

すでに源外の姿はなかった。

ナナフシ「あいつ一人で逃げやがったアアアアア！」

咲「死ねええええええええええ！」

ナナフシ「ぎゃああああああああ！」

ナナフシは咲にボコ殴りにされ始めた。

銀時「たくつ、葵、次回予告を頼む」

葵「はい旦那。咲、“冷血の鬼姫”目覚める！“漆黒の狗”と恐れられる陰子に勝てるのか！？次回“第五訓く冷血の鬼姫の実力く”です！」

銀時「それではさようなら」

ナナフシ「助けてよオオオオオオオオ！アアアアアアアアア！」

第五訓　冷血の鬼姫の實力（前書き）

ナナフシ「連続投稿！」

銀時「うわっ！ナナフシ！てか、体中ボロボロ！」

ナナフシ「気にするな！僕は読者の為ならばやってやるさ！たとえば死ぬ危険があつたとしても！」

銀時「お前は自殺希望でもあるのか！？」

ナナフシ「でも……」

銀時「でも？」

ナナフシ「一人だけ逃げた源外を許さん！行くぞ銀さん！」

銀時「え？なんでお」後でチヨコレートパフェを奢ってやる！」
よっしゃ！」

ナナフシ「行くぞオオオオオオ！」

銀時「オオオオオオオ！」

葵「あ、行っちゃった。それではどうぞ！」

第五訓　冷血の鬼姫の実力

「来い！“冷血の鬼姫”！」

咲は陰子に向かって木刀を横薙ぎに振った。

（速い！）

陰子は咲の剣を見て、そう思った。

「だけど、そんな単純な攻撃」

陰子は咲の木刀を防ごうとした。

ガンッ！

鈍い音が聞こえた。

「ぶっ！し、下からだと！」

陰子の顎に木刀が直撃したのだ。

「ど、どうなっている！今さっき確かに横薙ぎに！」

「私はね……高速で剣を横薙ぎから振り上げに変えたんだよ。つまりさっきのは、高速で振って生み出された幻影」

「つまり要領はあの突きと同じか」

陰子はニヤリと笑うと走り出した。

「なら、攻撃させなかったら良いこと！」

また消える刀で咲に襲いかかった。

咲はそれを受け流したり、防ぎ始める。

「ハア！」

陰子は突きを放った。

グサッ。

それが膝に刺さった。

「これでもう……ぶっ！」

陰子は宙を舞った。

そして体勢を立て直して着陸した。

咲が木刀を振り上げた後の格好で居た。

「油断しました……だけどこれでもう通常のスピードは出せない」

陰子は勝利を確信した。

だが、咲は立ち上がり、陰子の前まで距離を詰めた。

（ス、スピードが変わってない！）

陰子は驚いていた。

我慢して動かしたのか？と思ったが更に驚いた。

咲の顔は無表情のまままで全然痛がつている様子はなかった。

無言のまま咲は陰子に木刀で打撃のラッシュを始めた。

「ぶっ、がつ、ごっ、ぐっ！」

陰子はダメージを喰らっている。

防ごうとするが……。

（右！いや、違う下からだ！左！違う上から！）

何度防ごうとしても、舞いのような剣を防げないでいた。

「ハア！」

ドコオ！

咲は陰子の顔面を思いっきり木刀で叩いた。

「ぶっ！」

陰子は怯み、後ろに下がった。

（これが“冷血の鬼姫”の力！これで“白夜叉”には敵わないって

……“白夜叉”はどれだけ化け物なんだ！）

陰子はその事を考えると“白夜叉”に恐怖した。

「これで終わり？」

「いや、まだ！僕はあなを「やめろ」し、晋助！」

「高杉さん」

咲は高杉に敵意を向きだしにした。

「そんなに敵意を向きだしにするなよ咲」

「何か用ですか？」

「いや、もうお前の勧誘は諦める。俺たちの敵に回るんだな咲？」

高杉は笑った顔で聞いた。

「ええ、銀兄さん、ヅラさんと一緒にあなたを斬る！」

「ククク、そうかよ。さ、高杉イイイイ！」銀時か」

銀時が咲の後ろの道からやってきた。

「咲大丈夫か!？」

「うん」

咲の表情は元に戻った。

その途端、膝を抑えた。

「お前膝が!」

「大丈夫だよ」

咲は笑って見せた。

「ちっ、今すぐに病院に連れて行ってやる!高杉!」

「あっ?」

「今回は見逃してやる!次会うときはぶった斬る!」

銀時は咲を背負って、走って去っていった。

「ぶった斬る……ね」

高杉は“ククク”と笑った。

「晋助……」

「行くぞ陰子」

「うん」

高杉と陰子は闇夜に消えた。

第五訓　冷血の鬼姫の實力（後書き）

ナナフシ「源外イイイイイイ！見つけたアアアア！」

源外「ナナフシじゃねえか」

ナナフシ「覚悟オオオオオオ！」

ナナフシは木刀を振った。

源外「おっと、危ねえじゃねえか」

銀時「喰らえジジイ！」

源外「銀の字まで！？」

銀時「俺がチヨコレートパフェを奢ってもらう為に犠牲になれえええええ！」

源外「チヨコレートパフェの為かよ！」

ナナフシと銀時は源外の左右に立った。

ナナフシ・銀時「オラア！」

源外「そうは行くか！」

ビリビリ！

ナナフシ・銀時「ぎやあああああ！」
ドサッ。

二人は電撃を喰らい、その場に倒れ込んだ。

源外「ふん、甘いわ！おm「見つけた」へ？」

咲が源外をに睨んでいた。

咲「死ねえええええええええ！」

源外「ぎやあああああああ！」

源外の叫び声が響いた。

葵「……今回は“陰子のキャラ紹介”です」

ナナフシ「あ……後これも」

ナナフシは葵に紙を渡した。

葵「何々、『銀魂　冷血の鬼姫の日常　番外編咲と銀時、松陽との出会い』もよろしく。短編小説です……って、これ宣伝！？」

ナナフシ「……………」

葵「あ、気絶してる。それではまた次回」

陰子のキャラ紹介（前書き）

ナナフシ「ちゃっちゃと出せばよかった」

陰子「ククク、僕のキャラプロフィールね」

ナナフシ「陰子!？」

咲「陰子何しにきたの!」

陰子「今回だけだよ。それじゃ、どうぞ」

陰子のキャラ紹介

名前 影野 陰子

年齢 20歳 誕生日 9月17日

好き 高杉、後はない

嫌い 咲、銀時、桂、辰馬（って言うか戦う相手として楽しんでい
る）真選組、幕府

実は幕府に所属していた武士。

その月夜に隠れる事から“漆黒の狗”と恐れられた。

だが、幕府の事を嫌っており、反発的に動いていた。

そこを高杉に拾われた。

高杉の事が好きである。

銀時、咲、桂、辰馬を狙っている（辰馬は少ないだろうけどね）。

ナナフシ「僕は思った」

銀時「何だ？」

ナナフシ「なんか、銀さんには咲、土方さんには葵、高杉には陰子
となんかこうなってるねって」

銀時「咲が何で俺？」

ナナフシ「え？いや、咲が銀さんの事が好きだなんて……あ！」

銀時「咲が俺の事を……」

ガンッ！

銀時「ゴファ！」

銀時はその場に倒れた。

後ろには木槌を持った咲が立っていた。

咲「ナナフシ…」

ナナフシ「はい！」

咲「あれ……どうしてくれるの？」

ナナフシ「源外さん！カモン！」

源外「はいはい、この機械で記憶操作ができるぞ」

咲はそれを使い、自分が銀時の事が好きってバレた部分を消した。

咲「今度から気をつけてね？」

ナナフシ「はい！」

銀時「ん？俺はいつたい？何か忘れてる様な」

咲は銀時が起きたと同時に木槌を捨て、何もなかった様な顔をしている。

ナナフシ「銀さん、眠っちゃダメですよ」

銀時「あ？寝ちまったのか」

ナナフシ（銀さんがバカでよかった）

咲「それでは終わりです」

陰子のキャラ紹介（後書き）

ナナフシ「やふうう！番外編小説2の攘夷戦争を書いたぜえ！」

銀時「そうか」

ナナフシ「反応薄っ！」

咲「思い出したくない記憶だから」

ナナフシ「あ、ごめん」

銀時・咲「……」

ナナフシ「今回はここまで！それでは次回に会いましょう！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5198y/>

銀魂～冷血の鬼姫の日常～

2011年11月20日21時42分発行